短編映画『自死幇助課』制作プロジェクトの報告

島　田　英　二
北海道情報大学

Production report of the short film
"*The day the government assists suicide*"

Eiji SHIMADA
Hokkaido Information University

2019年12月

北海道情報大学紀要　第31巻　第１号別刷

〈報　告〉

短編映画『自死幇助課』制作プロジェクトの報告

島田英二*

Production report of the short film “*The day the government assists suicide*”

Eiji SHIMADA*

要旨

本稿は，2017（平成 29）年９月から 2018（平成 30）年３月にかけて北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科の映像表現系ゼミナール（島田ゼミ）において制作した実写短編映画『自死幇助課』(2018)制作プロジェクトについて報告する。本稿では企画から準備，撮影，編集といった映画制作のワークフローに従い，作品が完成するまでの過程とプロジェクトの成果について主に記載した。完成した作品は第１２回札幌国際短編映画祭に入選し, 2018（平成 30）年 10 月に上映された。

Abstract

This paper reports on the production of the short film, *The day the government assists suicide (2018)*, which was produced by Shimada seminar in the faculty of information media in Hokkaido Information University from September 2017 to March 2018. In this paper the following topics are discussed: planning, pre-production, shooting, editing according to the workflow. This film was nominated and screened in the 12th Sapporo International Short Film Festival and Market (SSF) in October 2018.

キーワード

映画制作(Film Production)　短編映画（Short Film）　映画演出(Direction)　映画祭(Film Festival)

* 北海道情報大学情報メディア学部　准教授，Associate Professor, Department of Information Media, HIU

1. はじめに

北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科には映像・アニメーションコースがあり，筆者は主に実写の映像制作分野で学生の指導に当たっている。本学では映像を学びたい学生はまず，２年生前期から始まる基礎専門科目「映画基礎演習」「アニメーション基礎演習」[1)]を履修し，実写とアニメーションの幅広い映像制作に触れることになる。さらに映像の勉強を続ける学生は，２年生後期に開講される応用科目「映像制作プロジェクト」を履修する。そして３年次から学生はゼミナールに配属となり，教員の指導を受けながら各専門テーマに沿って研究を行う。この他，映像の VFX について「ビジュアルエフェクト・演習」，モーションキャプチャ技術についての「特別演習」が長期休み中に集中講義として開講されている。講義で学んだ映像制作のスキルを発揮する場所の一つにコンテスト（映画祭のコンペを含む）がある。本学では 2011（平成 23）年から学生のコンテスト参加支援制度を開始し，これを受け筆者のゼミナールでは毎年，15～20 分程度の短編映画を制作し，札幌国際短編映画祭へ出品している。本稿では, 2018（平成 30）年に第 12 回札幌国際短編映画祭へ参加した短編映画『自死幇助課』の制作プロジェクトについて報告する。

2. プロジェクトの流れ

本プロジェクトは以下の流れで行った。
①企画開発，②プロット開発，③脚本執筆，⑤プリプロダクション，⑥撮影，⑦編集，⑧上映会，⑨応募, ⑩映画祭への参加
プロジェクトの目的は札幌国際短編映画祭へ出品するための短編映画作品制作と映画祭への参加にある。締切が 2018 年３月末であることから，まず撮影時期を 2017 年 12 月中旬～1 月初旬に設定した。そこから逆算してスケジュールを作り，後期がスタートする 2017 年９月中旬～10 月初旬までを企画開発，10 月中旬に第 11 回札幌国際短編映画祭のリサーチを行い，10 月末までに脚本の初稿完成，11 月中旬～12 月中旬をプリプロダクションとした。映像編集の完成後は MA を行い，３月下旬までに完成させる。以下，流れに沿って各工程について説明する。

2-1 企画開発

ゼミ生 10 名にひとり３案以上の企画案提出の宿題を課し, 33 案が集まった（表１）。

表 1 企画一覧

番号	テーマ	学生
1	写真	A
2	未発達障害	A
3	笑えなくなった男	A
4	ミサイル（北朝鮮）	A
5	脱出	B
6	色のない世界	B
7	「ごめんなさい」が言えない	B
8	カード転売	B
9	冒険（岩にささった剣を抜く）	C
10	子供（打倒大人）	C
11	父と娘（家出）	C
12	Jアラート	D
13	自転車の走る場所	D
14	交通事故とゲームのリスタート	D
15	筋トレ	E
16	引きこもりサイコホラー	E
17	転落（劣悪労働環境から殺人）	E
18	日本の危機（国会議員の不祥事等）	F
19	最後の喫煙者（筒井康隆の短編SF小説）	F
20	植物状態（乙一「失はれる物語」より）	F
21	一時間前の未来（乙一「失はれる物語」より）	F
22	アクション	G
23	女子高生の物の人生	G
24	本をきっかけに変化	G
25	過去にとらわれている人（母親を失くした）	H
26	集団心理（いじめ）	H
27	インターネットの匿名性	H
28	殺され屋	I
29	明るい日本が徐々に滅んでいくニュース	I
30	ゲームのやりすぎ	I
31	何をやっても2番	J
32	検索（検索と同じ行動）	J
33	克服（痛みを克服しようとする）	J

特徴としては，この年（平成 29 年）８月に北

1) この２科目は 2013～2016 年度カリキュラムでは「映像アニメ・演習」として一つの科目であった。

朝鮮によるミサイル発射があり，北海道上空をミサイルが通過する事件があったため，「ミサイル」「J アラート」といった時事的なテーマが提出されている。他には著名な作家の短編小説を原作に映画化を考えたものや，実話をもとにした案もあった。この中から学生による話し合いで３案に絞り込み，プロットの開発へと進んだ。選ばれた案は，10「子供」，28「殺され屋」，32「検索」と 33「克服」の合体案であった。

2-2　プロット開発

選ばれた３案について，ビートシート[1]を作成する。ビートシートとは，米国の脚本家ブレイク・スナイダーが提唱する脚本開発の手法である。本プロジェクトではこれを簡易化し，シーンで起こるイベントを箇条書きで書き出した。またこのプロット開発の段階で，内容の他に仮タイトル，コンセプト，ジャンル，ターゲット，キャッチコピーなどを検討した。会議の結果，「殺され屋」「検索＋克服」の２つが支持を受け，両企画とも脚本第一稿まで進めることとなった。

2-3　脚本執筆

この段階ではプロットをもとに脚本を執筆する。第一稿では登場人物の名前や年齢，物語の場所や世界観のルールなどが詳しく検討される。またこの時期にちょうど札幌国際短編映画祭の第 11 回が開催されていたため，リサーチし，ノミネート作品の傾向分析を行った。学生チームの分析では，社会的なテーマが感じられる作品が映画祭で評価を受けているという結論となり，今回制作する作品にも何らかの社会性を込められないか検討することになった。そうした中で 2017（平成 29）年 10 月 30 日に神奈川県座間市で連続殺人事件「座間 9 遺体事件」が発生した[2]。この事件は犯人が SNS（twitter）を使用し，自殺幇助を称して自殺志願者を誘い出し殺害したもので，「殺され屋」の企画を考えていたチームに衝撃を与えた。「殺され屋」の企画は，誰かの身代わりになって「殺される」（実はトリックがあり死んでない）という架空の職業を描いたものだったが，「死にたいほどつらい心理状態の人間」の存在に「自殺幇助する存在」が引き合うという現実とその不条理さから，「自殺幇助」をテーマに考えてみることになった。まず一般的な「自殺する理由」「自殺の多い国の社会背景とデータ」といったものから，「死ぬ権利」「死を与える権利」「死刑制度」へと派生し，最後には「安楽死」「尊厳死」および「死を選択できる法制度」といった具体的な事例についてリサーチを行っていった。こうして脚本は「殺され屋」の物語から大きく変わり，「自殺幇助」をテーマに第二稿を開発した。脚本執筆の際に参考としたのは，スイスに実在する自殺幇助のための団体「エグジット（EXIT）」と「ディグニタス（Dignitus）」である。スイスでは自殺幇助が合法とされており，自殺幇助を求める人々にサービスを提供する団体が複数存在する。そして，エグジットはスイス市民を対象とするが，ディグニタスは海外から訪れる人でも利用できるため，日本からの登録者もいるという[3]。これらの自殺幇助を受けられるのは，激しい痛みを伴う症状や不治の病などに苦しむ人々であり，衝動的な行為としての自殺は認められない。利用者は末期がんの患者が最も多く，安楽死のサービスは本人による投薬の実行によって提供されている。安楽死は 1990 年代以降，オランダやベルギーで安楽死法という形で合法化され，2015 年にはアメリカのカリフォルニア州でも合法となった[4]。一方，日本では安楽死の議論はまだ進んでおらず，現状では法的に未整備であるため違法である。そこでこの作品では日本を舞台に，架空の設定を設けた。また日本では自殺者数の数が年間 2 万人を超え，他国に比べ自殺死亡率の高い [5]社会でもあるため，仮にわが国に国立の「自殺幇助機関」があった場合，自殺幇助（死を選択できる）機能だけでなく，自殺予防（死を

回避させる）機能も求められると考えた。つまりこの物語の中では，自殺幇助の機関が設立されたのは自殺防止を目的としており，自殺を法律で禁止し，自殺の悩みは国がカウンセリングや診断などで「適正に管理」するというアイデアである。また，日本は超高齢化社会であるが，スイスで安楽死の議論が進んだ背景には高齢化の影響もあるという。そこでこうした施設が日本の社会に積極的に普及していた場合の３つのケースを考えた。すなわち，a）ディグニタスなどの日本支部が利用されている，b）病院等の中に新たな診療科ができる，c）自治体の中に住民サービスとして対策課が設置されている，といったものである。こうして第二稿の物語は，「自死幇助課」を描くことになった。主人公は「自死幇助課」に勤務し，「死の選択は個人の自由」という考えを持つが，母親が自死幇助を希望することを知り，できれば母親に生きてほしいと願い，そして自分の中の矛盾に葛藤する（写真1）。第二稿の主な登場人物は，「自死幇助課」に勤める主人公，その同僚の友人，幇助を希望する中年男性とその妻，主人公の母親の５名となった。ここから改稿を重ねていき，最終的な完成稿を作っていく。改稿にあたり大きな問題となったのは，母親の存在であった。自分の母親の死期が近いことを知った場合，主人公は母親との最後の時間を大切に使おうとするであろう。その場合，残された時間を家族でどのように過ごすかが重要となり，物語は自殺幇助から家族のテーマに逸れていってしまう。また，制作予算と制作期間の限度から，脚本を 15 ページ程度に制限しなければならない事情があった。主人公が「自死幇助課職員」として担当することになる中年男性と，それに反対する妻との葛藤を描きつつ，母親との物語も描くことを考えると，15 ページに収めるには物語の整理とエピソードの取捨選択が不可欠であった。こうして第四稿までに主人公の母親は脚本から削除され，主人公と中年男性の物語を厚くする方向で合意した。脚本は第 10 稿を最終稿として完成した。

2-4　プリプロダクション

脚本第二稿で主人公と中年夫婦は必ず登場すると確定したため，この時期からキャステ

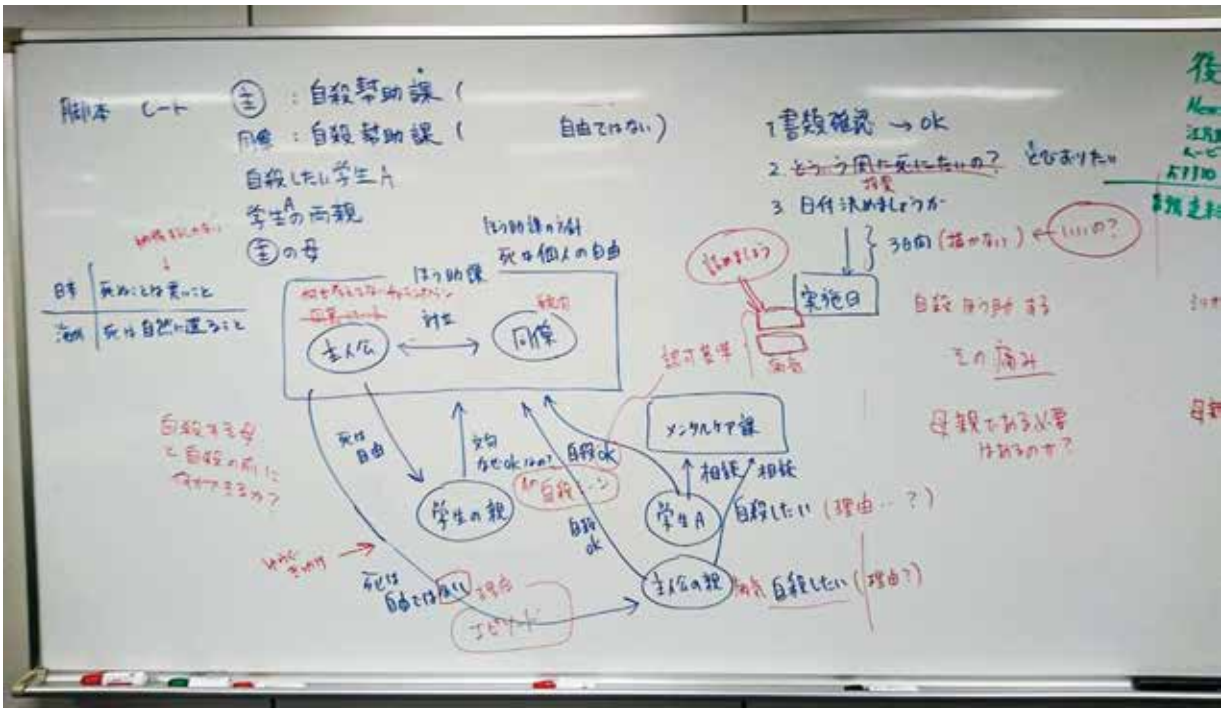

写真１　脚本会議の板書（第二稿時）

ィングやロケーション・ハンティング（ロケハン）といった撮影準備を始めた。

2-4-1　スタッフィング

筆者のゼミナール（島田ゼミ）では，映像業界の一般的なスタッフィングとはやや異なる方式を採用している（図１）。

図 1　島田ゼミでの役割分担図

プロジェクトはゼミの３年生が中心となり，ゼミの４年生，ゼミ外の有志の学生，教員が協力してスタッフを務める。プリプロダクションの人員配置は 10 名を基本とし，プロデューサー部に２名（プロデューサー，アシスタントプロデューサー），ロケハン部に２名，役者部に２名，美術部に２名，そして演出部に２名（監督，助監督）としている。ゼミ生の人数が少ない年は部署を兼任するなど，調整を行う。ロケハン部，役者部という名称は島田ゼミ独自のものであるが，これは制作部に集中しがちなマルチタスクをできるだけシンプルにし，役職名で責任範囲を明示できるようにしているものである。役者部，ロケハン部とも経費に関係するためプロデューサーに相談・指示をあおぎ，同時に作品の質にも関わるため監督への相談と決定をもらうプロセスがある。プロデューサー部は主に金銭管理と会計のほか，外部への書類作成・依頼・交渉・御礼・謝罪といった渉外的な部分を責任範囲としている。また基本的に会議の進行はプロデューサー部が行う。

2-4-2　予算・経費

本プロジェクトの制作予算は，本学から助成金 20 万円，学生から 15 万円（ひとり 1 万 5 千円）の合計 35 万円であった。内訳は以下の通りである（図２）。助成金は主に学生の制作で普段お金をかけにくい，キャスティング，撮影（照明）機材，スタジオでの MA といった費用に充てるよう指導している。経費の内訳を見ると，キャスティング料と照明機材，BGM・MA で 59%であり助成金金額とほぼ一致している（図３）。助成金は費目に制限があるため，ケータリング費，交通費，人件費については学生の予算から支払いを行う。

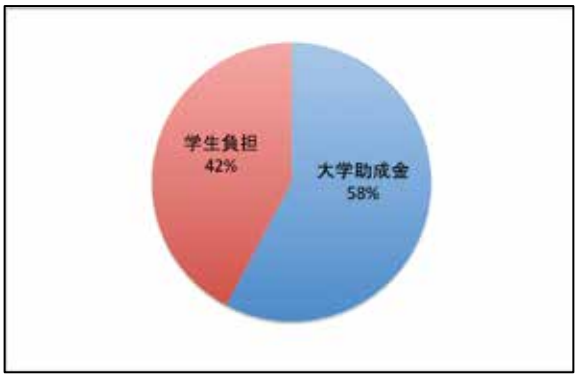

図 2　制作費内訳

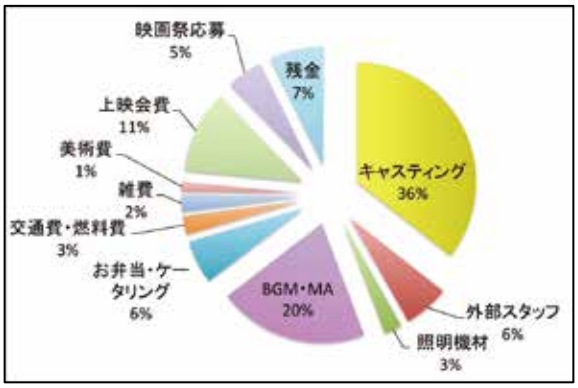

図 3　経費内訳

2-4-3　キャスティング

役者部は主要な登場人物について，脚本から年齢，役柄を抜粋し，印象や身長など具体的なイメージと撮影予定日や条件をまとめた資料を作り，キャスティング事務所にリクエストを送る。その後，各社から送られてきた

写真資料をもとに書類選考を行い，候補者へオーディションを行った。学生はオーディションが初めてであるため，事前にどのように行うか一通り流れのシミュレーションと，当日配布するオーディション用台本など資料の作成，当日の進行役・ビデオ撮影役など，役割分担と準備をして臨んだ。オーディションでは許可を得てビデオ撮影をし，ビデオ共有サイトを使ってスタッフ間で資料として共有した（写真２）。

写真２　オーディション映像の共有

キャスティングは，自死幇助希望の中年男性・林幸助役探しが難航した。この遅れから，撮影日が何度か変更になり，撮影許可の協力者にも迷惑をかけるなど影響が出た。また予算面では，主要なキャスト５名全員をキャスティング会社を通して雇うことになったため，当初予定していた金額を超過し，メンバーから制作費を追加徴収することになった。そのため，撮影するカメラを変更するなど，機材の選択にも影響があった。最終的に役者は表２の通り決定した。

2-4-4　ロケーション・ハンティング

ロケハン部は，脚本から撮影に必要なロケ地をリストアップして探していった。メインのロケ地「自死幇助課」は架空の場所のため，ロケハン部は病院のイメージと市役所のイメージの２つの方向性で探した。

表２　登場人物とキャスティング一覧

役名	設定	キャスト
西川直哉（24）	主人公。自死幇助課に勤務。今の自死幇助制度に疑問を持つ	吉本琢哉（Egg）
橋本翔太（24）	主人公の同僚。気さくで愛想がよく，人に分け隔てなく接する	佐々木駿（Egg）
林　真理（36）	夫の自死幇助を止めに来た。夫の死を間近にして感情を表に出す	大橋由紀子（Egg）
林　幸助（38）	カメラマン。徐々に視力を失う病気にかかる。カメラマンのまま人生を終えたいという気持ちから自死幇助を受けに来た	山崎大昇（Egg）
吉田信二（52）	直哉と翔太の上司。課長。	西岡良介（ｽﾏｲﾙﾘﾝｸ）
吉田の部下	吉田の部下。体格がいい	伊藤淳矢（劇団ｴﾚﾒﾝﾂ）
医者（45）	幇助の際に立ち会う医者	清水芳行
高校生	幇助を受ける男子高校生	小俣一希
受付の女	幇助課の受付職員	畠中紗彩（劇団ｴﾚﾒﾝﾂ）

ロケハン担当者は江別市内の病院や市役所，市民センター，図書館などを当たったが，なかなか監督のイメージに合う場所がなく，許可が下りても使用できる時間が短かったり，スケジュールに当てはめることが難しかったため断念した。最終的には本学の学生サポートセンター（写真３）を借りることができ，小物などを用意して「自死幇助課」の受付として撮影した（写真４）。その他，自殺幇助を行う「幇助室」は本学の医療情報センターの診察室，脚本中の「居酒屋」についても実際の居酒屋から協力を得ることができたため，学生の普段の自主制作よりも大きなスケール感で撮影できる制作環境を作ることができた。ロケハン部には，イメージがまだ固まっていない中でロケ地を探さなければならなかった

ことや，経験不足による決断の難しさがあった。たとえば「自死幇助課の受付」について，監督は当初，受付の隣には廊下があり病院のような手すりがあることや，床はカーペットではないなどの希望があり，ロケハン部は多くの候補を探すことになった。最終的には受付と廊下を切り離し，別々の場所で撮影して編集で一つのつながりに見せるようにした。

写真３　学生サポートセンター

写真４　劇中の「自死幇助課」

2-4-5 美術制作

美術部はまず脚本をもとに，制作するものや用意するものをリストアップした（表３）。今回は心電図や点滴，ナースコールといった入手が難しい医療器具が小道具にあったが，本学の医療情報学科の教員の協力によって，容易に手配することができた。このような点は本学の多様な学部構成から得られるメリットであり，本プロジェクトの強みと言える。また，参加学生にとっては学部の枠を超えて他学部の教員の専門分野や施設に触れるよい機会になった。他にロケハン部から上がってくる写真資料をもとに美術のプラン（写真５）を作成した。劇中の「幇助課オフィス」は，本学の国際交流支援室を借りることができたため，デスク周りのカラーコントロールと，劇中の設定に不要なものや映ってはいけないものを許可を得て移動した（写真６）。

表３　美術小道具リスト

s	品名	個数	備考	43120	43121	2月4日仮
1.2.5.8.11	ボールペン	5	学校	○	○	○
1.6	スマートフォン	2	長瀬			○
1.15.17	聴診器	1	清水先生			○
1.15.17	ペンライト	1	清水先生			○
1.15.17	心電図	1	清水先生			○
1.15.17	白衣	1	清水先生			○
1.15.17	ナースコール	1	清水先生			○
1.15.17	ベッド	1	老健			○
1.15.17	点滴	1	清水先生			○
1.15.17	書類		作成			○
3	封筒	1	長瀬	○		
3.5	資料		作成		○	
3.7.10.12	カメラ	1	ゼミ室		○	
3.7.10.12	写真				○	
3.7.10.12	賞状	1	長瀬		○	
3.7.10.12	額縁	1	長瀬		○	
3.7.10.12	盾	1			○	
3.7.10.12	トロフィー	2			○	
3.7.10.12	flowerpet	1	購入		○	
4	メニュー表	1	作成	○		
4	唐揚げ	1	作成	○		
4	サラダ	1	作成	○		
4.7	皿	1	購入	○	○	
4.7	グラス	1	購入	○	○	
4.7	ウーロン茶	1	購入	○	○	
4.7	箸	4	長瀬	○	○	
5	印鑑	1	長瀬		○	
5.8	朱肉	1	長瀬		○	
6	テレビ	1	ゼミ室	○		
6	椅子	2	学校	○		
6	テーブル	1	学校	○		
6	テレビ台	1	長瀬	○		
7	ランチ	2	作成		○	
7	フォーク	1	長瀬		○	
13	ブランケット	1	長瀬		○	

写真５　美術資料（幇助課オフィス用）

写真６　劇中の幇助課オフィス

特殊な小道具では幇助課で使用する「自死幇助契約書」や，劇中のテレビで流れる自死幇助に反対する学生デモのプラカードといった制作物があった。プラカード制作の美術リサーチ資料では 2014 年に香港で起こった反政府デモの写真が登場した（写真７）。

写真７　美術資料（学生のデモシーン用）

このように作品制作を通じてスイスの安楽死の問題や香港の雨傘革命といった海外の事例にアンテナが向かうことも，本プロジェクトの教育効果の一つとして評価している。学生デモのシーンは，実際には本プロジェクトの美術スタッフなど数名しかいないが，カメラのフレーミングで切ることによって人数が少ないことを隠して上手く見せている（写真８）。小道具の他に衣装の手配も行った。服や靴は試着が必要であるため，リハーサルの際に衣装合わせを行い，監督と相談の上，各シーンの衣装の組み合わせを決定した。

写真８　劇中の TV（学生のデモ）

2-5　撮影

撮影は 2018 年 1 月 20 日（土）, 21 日（日）, 27 日（土）の３日間行った。まず当日の動きを円滑にするため，前日にすべてのスタッフが集まるオールスタッフミーティングを行い，香盤表（詳細な撮影スケジュール）の最終確認を行った（写真９）。出演者のほか，外部スタッフとして札幌ビューティーアート専門学校からヘアメイク担当の森愛莉さん，制作応援でゼミナールの４年生も参加した。ミーティングでは香盤表，脚本，絵コンテ，衣装や配車，地図等の情報を一冊にまとめた撮影台本を配布した（写真 10）。

写真９　オールスタッフミーティング（1/19）

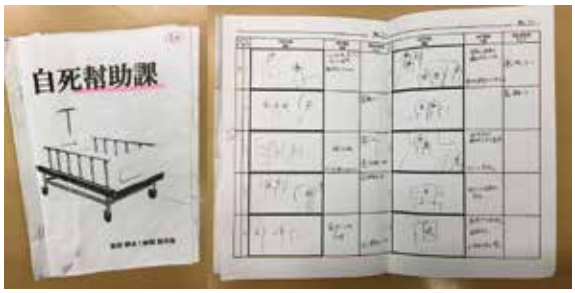

写真 10　撮影台本

2-5-1 撮影１日目

１日目は居酒屋のシーンから撮影を開始した。本物の居酒屋で撮影許可を得たが，営業時間外（昼間）の撮影となったため，夜のシーンを明るい時間帯に撮影することになった。照明スタッフは現地に入ってすぐに建物外側から専用のシートで窓を遮光した(写真 11)。居酒屋のメニューと食べ物，飲み物は美術部が用意したものを持ち込んだ（写真 12)。居酒屋の撮影が始まって間もなく録音担当の学生が体調不良のため早退することになった。高熱と咳，関節痛など本人の説明からインフルエンザが疑われたため，撮影半ばであったが帰宅と医療機関での受診を促した。その後この学生は病院でＢ型インフルエンザと診断された。現場では録音の担当者が不在となったため，録音助手の学生が録音に回り，制作応援で入っていた４年生が録音助手を務めた。

写真 11　撮影現場（居酒屋・昼）

写真 12　劇中の居酒屋（夜として撮影）

居酒屋の後は大学に移動し，多目的教室で「自死幇助課・休憩室」のシーンを撮影した。多目的教室にはテレビがないため小道具として持ち込み，テレビ画面には学生デモのニュース映像を後で合成するためグリーンの画面を映して撮影した（写真 13)。

写真 13　撮影風景（多目的教室）

最後に夕方から大学の応接室で，「自死幇助課・応接室」のシーンを撮影した。多目的教室と応接室はロケーションが大学で，部屋も比較的広い環境であったため，映像研究部の後輩たちも見学・参加することができた。早退したスタッフの欠員も補いながら，本学の映像アニメーションコースの２年生にもプロジェクトに参加してもらうよい機会となった。

2-5-2 撮影２日目

２日目は自殺幇助を依頼する中年夫婦の家「林家」のシーンから撮影を開始した。朝７時半に大学に集合し，出演者は大学のメイクルームでヘアメイクなどの準備を進め，スタッフはその間に学生の家に移動し美術などの仕込みを行った。午前９時からの撮影は夜のシーンであったため，照明スタッフは一軒家のリビングルームの大きな南向きの窓を遮光した（写真 14)。続いて昼間のシーンのため遮光シートを取り除き（写真 15），またその後には夜のシーンのため遮光を行った。これは監督の意向で脚本の順番通り順撮りで撮影したいということであったためで，夜→昼→夜→昼と，照明のセッティングの効率が悪くなっている。照明スタッフは大きな面積の遮

光をすぐに付けたり外したりできるよう，引っ越し等で使われる黒のプラスチックダンボールを用意して遮光に必要な時間を短縮した。リビングのカーテンは遮光カーテンであったため，多少の光の漏れがあってもカメラの向きと明るさの設定で容易に夜を作り出すことができた。この日は移動用の車輌が４台あった。住宅地は雪で駐車場所がなかったため，制作部が事前に近隣の商業施設の駐車場に許可をとり，駐車位置を確保した。

写真 14　南向きの大きな窓を遮光

写真 15　遮光シートを外した環境

次のロケ地は本学の学生サポートセンターで「自死幇助課・受付」のシーンの撮影であった。大学への移動中の車中で，林真里がタクシーで移動するというシーンを撮影した。乗用車をタクシーに見せるため，後部座席に白いレースを敷き，除雪の行き届いた揺れの少ない道を選んで撮影を行った（写真 16）

写真 16　劇中のタクシー内のシーン

車中撮影の間，他のスタッフは学生サポートセンターを「自死幇助課・受付」にするための美術（写真 17），林幸助役の衣装チェンジなど準備を行った。この頃また新たにインフルエンザ症状を訴える学生が現れ，早退と交代をしながら撮影を続けた（写真 18）。

写真 17　劇中の「自死幇助課」の表示プレート

写真 18　撮影風景（学生サポートセンター）

2-5-3 撮影３日目

３日目の撮影は，撮影２日目から６日間あけて行った。この間に新たにインフルエンザの診断を受けた者が数名現れ，自宅待機で参加できない者もいた。幸い監督やカメラマンに発症がなかったため，欠員の出た部署にスタッフを追加して予定通り撮影を行った。まず国際交流支援室を「自死幇助課・オフィス」として撮影した。部屋全体に対して撮影許可が得られており，美術の仕込みが少なかったことや，周辺の会議室を控室として使用することができ，撮影は順調に進んだ（写真 19）。

写真 19　撮影風景（国際交流支援室）

この後「幇助課・応接室」のシーンを撮影し，最後のロケ地である医療情報センターのバーチャルホスピタルに移動して「幇助室前廊下」のシーンを撮影した（写真 20）。

写真 20　撮影風景（バーチャルホスピタル）

この場所は床の青色の格子のカーペットタイルが特徴的であるが，映像の中ではフレームに入れず，足元を見せないことで前のロケ地からの連続性を保つようにした（写真 21）。

写真 21　劇中の幇助室前廊下のシーン

「幇助室」のシーンは，同バーチャルホスピタルの診察室で行った（写真 22）。この場所は非常に狭くスタッフが数名しか入れないため，確認用のモニターを取り外し，監督・カメラ・録音など必要最小限の人数で撮影を行った。このシーンでは点滴や心電図，ナースコールといった小道具が印象的に使用されている（写真 23）。

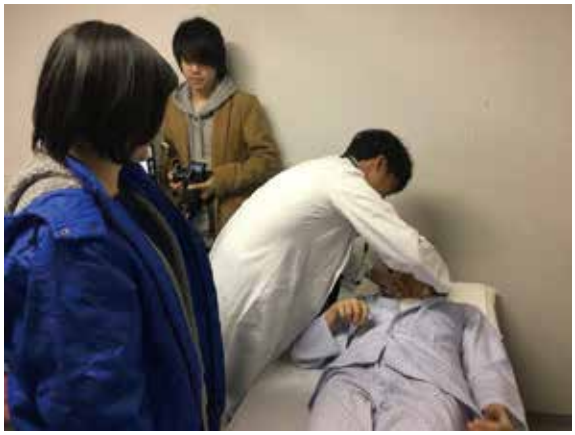

写真 22　撮影風景（診察室）

写真 23　劇中の幇助室のシーン

2-6　撮影機材

カメラは Sony α 7Sii を使用し，ログ収録（S-Log2）で撮影，アスペクトはシネマスコープ，FPS は 24 とした。撮影時は Blackmagic Video Assist 4K で色味を確認した。

2-7　編集

撮影した素材を絵コンテ通りに並べ，順序やタイミングを調整した後，映像の合成を行った。「幇助課オフィス」のパソコン画面については，クロマキーを使って撮影した（図 4）。現場にデスクトップ PC はあるがログインが必要なため，裏側からノート PC をつなぎ，モニターに緑の画面を表示した。

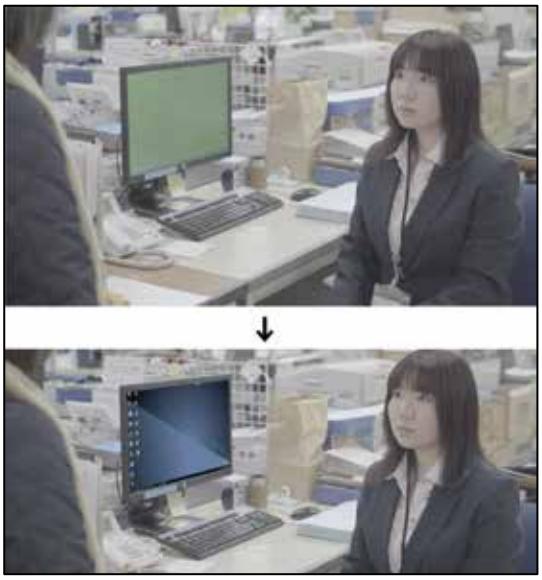

図 4　パソコン画面の合成

図 5　「幇助中」サインの合成（CU・正面あおり）

脚本の設定で「幇助室」の上部には「幇助中」のサインが光る設定としたが，これは美術で用意することが難しかったため，編集時に CG で合成した（図 5）。合成素材は After Effects のプラグイン Element 3D でオブジェクトを制作し，向きや色などを調整した（図 6）。カラーグレーディングは Premiere Pro CC の Lumetri カラーで行った。S-Log2 収録の素材に LUT を充て，黒を引き締め，全体的に彩度を低めにし，やや青みのある暗くドラマチックな画面演出とした（図 7）。映像の編集終了後は，MA に向けて音の素材の整理をした。

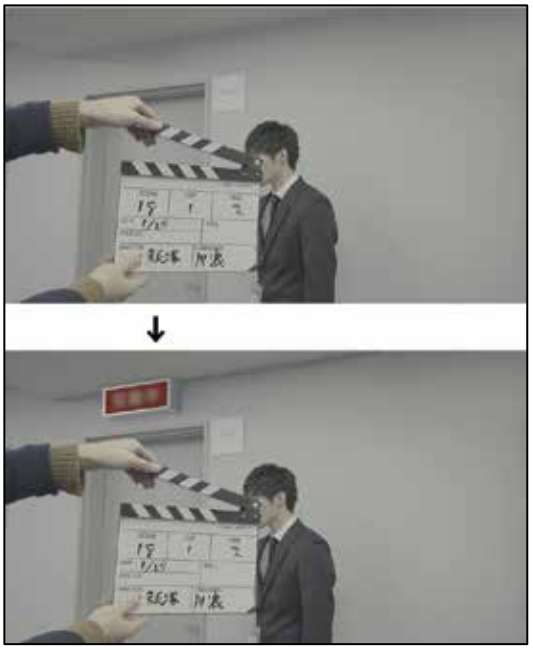

図 6　「幇助中」サインの合成（ワイド・斜め）

図 7　カラーグレーディング前後の比較

2-8　MA

音の仕上げを札幌市のスタジオ・リッチョで行った（写真 24）。MA ではラストシーンの音の演出でセリフがあるものとセリフを消したものの２つの可能性があったため，監督の意向で２つのバージョンを作成し，最終的にセリフのないものに決定することにした。

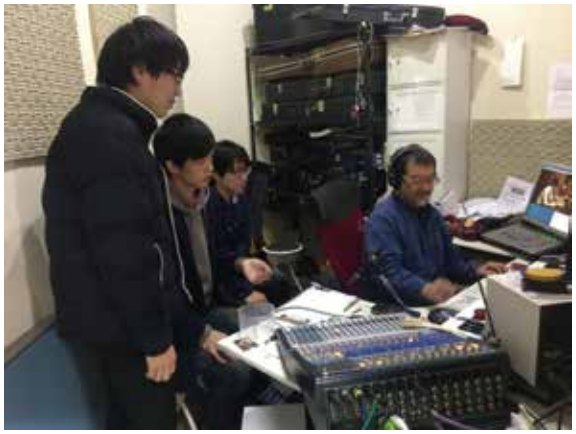

写真 24　MA の風景

2-9　作品情報

完成した作品の情報は以下の通りである（表４）。英題は直訳を避け，「政府が自殺を幇助する日」とやや説明的にした。

表 4　作品情報

作品名	自死幇助課
英題	The day the government assists suicide
長さ	20 分 51 秒
フォーマット	FHD｜24P｜カラー
ジャンル	フィクション
完成年	2018 年
あらすじ	自殺者数が増加の一途をたどり，国民の自殺を管理する「自殺幇助の総合施設」が新設された日本。自らの意思で自由に死を選ぶことができるようになった世界で，自死幇助課に所属する「西川直哉」はその制度に疑問を持ち始めていた。時を同じくして，視力を失いつつあるカメラマン「林幸助」とその妻「林真理」の葛藤が始まる。
主演	吉本琢哉，山崎大昇，大橋由紀子

エンディングのスタッフクレジットは以下の通りとなった（表５）。

表 5　スタッフクレジット

脚本・監督	飯塚悠市郎
プロデューサー	小林知弘，渡邊健太郎
エグゼクティブ・プロデューサー	島田英二
プロデューサー	小林知弘，渡邊健太郎
撮影	川浪大地
撮影補助	冨樫翔
録音	平野稜大，矢ヶ崎崚祐，加藤隆也，小俣一希
録音補助	野見山航嘉
照明	小林知弘
照明補助	杉浦憲太郎，星川楓
美術	長瀬丈一郎，矢吹龍太郎，小俣一希
編集	渡邊健太郎，川浪大地
役者部	蒲生真由，小林由奈，竹田シェルパ花菜
助監督	横山立，加藤隆也
制作	矢ヶ崎崚祐
制作応援	矢吹龍太郎，長堀力人，谷口天斗，吉田卓哉
ヘアメイク	森愛莉（札幌ﾋﾞｭｰﾃｨｰｱｰﾄ専門学校）
メイキングビデオ	村中涼平，小俣一希
MA	塚原義弘（Studio Riccio）
車輌	矢吹龍太郎，川浪大地，谷口天斗，野見山航嘉，沢向航，島田英二
協力	Casting Office Egg Casting Office スマイル・リンク 北海道情報大学劇団 ELEMENTs 北海道情報大学映像研究部 株式会社ムービーングワーク 北海道情報大学医療情報センター 鳥せい江別野幌店 蒲生宅

今回はインフルエンザの流行で録音担当者が撮影日によって交代したため，録音のクレジ

ット人数は４名となっている。また，役者の人数が多く，車輌台数が５台あったことや欠員による部署人数の補強などで制作応援が多くなっている。結果として本学の２年生７名・３年生 10 名・４年生５名の計 22 名，役者９名，指導教員１名，学外からのスタッフ２名の合計 34 名が参加するプロジェクトとなった。また学内の劇団や映像研究部との連携，撮影許可を得ている各ロケーションで立会者の協力を得ている。映画祭に提出する公式の作品画像としては以下の２枚を選出した（写真 25，写真 26）。

写真 25　作品画像 1

写真 26　作品画像 2

2-10　上映会

完成作品の上映会を，2018 年 3 月 23 日（金）に札幌市の狸小路６丁目にあるシアターキノで行った。関係者は無料招待としたが，有料で一般にも公開し，宣伝のためフライヤーを制作した（写真 27，写真 28）。宣伝は twitter，Facebook と口コミで行い，29 名の来場があった。完成した作品の披露だけでなく，学生の成長を見てほしいというコンセプトから，過去に制作した学内ショートフィルムコンテスト２作品（『Shady App』（1 分 16 秒），『AM11:00』（2 分 57 秒）），小樽ショートフィルムセッション のために制作した『記憶』（10 分）を加えた４本を上映し，各プロジェクトの説明と舞台挨拶，出演者の紹介を行った（写真 29）。

写真 27　上映会フライヤー（表）

写真 28　上映会フライヤー（裏）

上映会も一つのプロジェクトとして，役割を決め時間をかけて取り組んだ。ワークフローは，シアターキノへの企画書の作成と交渉，上映素材（Blu-ray）制作，ポスター・フライヤーの制作，宣伝とSNS管理，MC台本の作成，チケットとお金の管理，当日の会場受付（写真30），来場者の誘導，ゲスト対応，記録撮影（写真31）などである。

写真29　「自死幇助課」監督挨拶

写真30　劇場での受付を学生が担当

写真31　上映後の写真撮影

3.　コンテスト応募

現在，日本国内には様々な映像のコンテストがある。日本から参加できるコンテスト情報をまとめているポータルWEBサイト「登竜門」によれば，2019年5月9日現在，映画・アニメ・動画のカテゴリーでは53件[2)]の映像コンテストの情報が掲載されている。内訳は，映像・映画（26），アニメ（14），動画（13）であり，映画・アニメ・動画のカテゴリーでは映像・映画に分類されるコンテストの数が多い。その中で，作品の長さやテーマ，制作年度，プロ・学生対象など細かく分かれ，様々な応募条件がある。自治体の名前を冠するコンテストや映画祭も多く，地域振興を目的とするものや，テーマを設定して募集する部門もある。映画祭にはコンペ形式のほか，ノンコンペや招待枠での上映を行うものもある。

3-1　北海道の映画祭と映像コンテスト

北海道の映画祭と映像コンテストを表6にまとめる。最も歴史のあるゆうばり国際ファンタスティック映画祭は，長さの上限はないが「イマジネーション豊かなファンタスティック作品であることが望ましい」という応募条件がある。函館港イルミナシオン映画祭には「シナリオ大賞」があり，北海道内で唯一，映画の脚本を募集している。これまで「函館」をテーマに11本のシナリオ（長編，規定で75～100枚以内）が映像化された。2018年からは30分以内の短編映像作品の募集も始まっている。その他にも小樽や十勝など，地域の名前を冠した映画祭が各地にある。北海道映像コンテストは映画祭ではないが，北海道における映像コンテンツの普及と向上・人材育成を目的に，2001年から一般社団法人北海道映像関連事業社協会によって開催されている。応募できる部門は6つあり，放送番組部門，地域振興コンテンツ部門，高校生や専門学

2)　5月以前の締切のもは削除されていたため，年間では60～70程度あると推測される。

校・大学を対象とした学生部門などがある。

表 6　北海道の映画祭と映像コンテスト

初回	名称	コンペ	上限
1990	ゆうばり国際ファンタスティック映画祭	○	なし（一部 40 分以下）
1995	函館港イルミナシオン映画祭（映像は 2018～）	○	30 分以内
1995	星の降る里芦別映画学校	×	−
1996	SHINTOKU 空想の森映画祭	×	−
2001	北海道映像コンテスト	○	30 分以内
2006	札幌国際短編映画祭	○	30 分以内
2009	小樽ショートフィルムセッション（隔年開催）	○	10 分以内
2014	新千歳空港国際アニメーション映画祭	○	長編：30 分以上，短編：30 分以内
2016	とかちリトル映画祭	×	−
2017	札幌学生映像コンテスト	○	8 分以内

3-2　札幌国際短編映画祭

札幌国際短編映画祭は，実写やアニメーション，ドキュメンタリーなどジャンルを問わず，30 分以下の映像作品を対象とする日本最大級の国際短編映画祭である。世界のフィルムメーカーが作品応募に使用している WEB 上の映画祭応募プラットフォーム filmfreeway, shortfilmdepot に対応しており，世界の短編映画界で知名度も高い。2018 年の第 13 回開催では，世界 106 の国と地域から 3,604 本の応募があった。この数は日本でもトップクラスであり，世界中から応募があることが札幌国際短編映画祭の特徴である（図 8）。また，国内で唯一マーケット機能を持つ国際短編映画祭でもあり，上映機会の創出や販売，映画祭を通じた国際交流，プログラム交換なども行っている。映画祭ではここから選ばれた優秀作品と特別プログラムなど約 100～120 本が上映され，映画祭には国内外から来たフィルムメーカーやゲストが参加する（写真 32）。

図 8　応募国の分布（2018）

写真 32　第 13 回札幌国際短編映画祭（2018）

札幌国際短編映画祭は，映画祭のミッションとして以下の 4 つを掲げている。

①コンペティション：世界の才能ある監督の発掘
②マーケット：ショートフィルム作品の価値付けと売買
③映像教育：子供たちの映像ワークショップ，映像教育による映像コンテンツ産業の底辺拡大
④国際交流：作品を通じて直にコミュニケーションすること。ミーティングやセミナーなど，国際会議の開催

コンペの審査員には国内外の著名な映画監督や映画祭プログラマーなどを招き，グランプリなど主要賞のほか，脚本賞や作曲賞，撮影賞など 20 以上の部門賞がある。

3-3　札幌国際短編映画祭への参加

本学では 2011（平成 23）年に初めて札幌国際短編映画祭に参加して以来，平成 31 年現在まで 7 年連続で入選している。第 9 回札幌国際短編映画祭では，本学情報メディア学科 11 期生が制作した短編映画「COLOR」がアミノアップ北海道新人監督賞を受賞した。本プロジェクトで制作した短編映画『自死幇助課』も第 13 回札幌国際短編映画祭に応募し，入選した。映画祭の開催期間は 2018（平成 30）年 10 月 11 日（木）～14 日（日）と 19 日（金）～21 日（日）で，札幌プラザ 2.5 をメイン会場に開催された。入選作品は映画祭の WEB サイトで紹介され（写真 33），映画祭での上映前の舞台挨拶や（写真 34），オープニングや授賞式など映画祭の全イベントに参加できるフィルムメーカー・パスを与えられる。

写真 33　第 13 回札幌国際短編映画祭 WEB サイト

写真 34　上映前の舞台挨拶（北海道セレクション B）

映画祭への参加を通して他の入選監督との交流や作品鑑賞，著名な国際審査員に作品を見てもらえるなど，映画・映像業界へ進むチャンスも広がる。また，プロジェクトに参加する前は観客であった学生が，映画の作り手となって壇上に立つことで，見方が逆転し，新たな視野の獲得や新たな経験を蓄積する貴重な機会となった。こうした体験は他では得られないものであり，就職活動で語られるエピソードにも使えるほか，本人たちの自信にもつながる。『自死幇助課』は期間中 2 回，「北海道セレクション B」というプログラムで劇場で上映され，プロデューサーの小林知弘，脚本・監督の飯塚悠市郎が壇上で舞台挨拶を行った（写真 35，写真 36）。

写真 35　舞台挨拶（小林，10/12）

写真 36　舞台挨拶（飯塚，10/12）

札幌国際短編映画祭への入選と公開情報は学内の教職員メーリングリストにリリースを流したほか，本学の WEB サイトのトピックス（写真 37），2018 年 10 月 6 日（土）7 日（日）

と開催された本学の学校祭「蒼天祭」でのポスター掲示，島田ゼミの Facebook と twitter でも宣伝した。また，本プロジェクトの報告を学内報「ななかまど」第 69 号に投稿した（写真 38）。この記事はプロデューサーの小林が原稿執筆とレイアウトデザインを行った。

写真 37　本学 WEB サイトでの入選のお知らせ

3-4　その他のコンテストへの応募

第 13 回札幌国際短編映画祭への入選を目的として始めた本プロジェクトであるが，その他にも条件が合う映像のコンテストや映画祭へ作品を応募した。本作品は長さが 20 分 51 秒であり，応募条件が 20 分以下の映画祭には応募することができなかったが，条件が合う８つの映画祭・コンテストに作品を応募した。結果は落選であったが，プロデューサーの学生も積極的に応募に取り組んだ。

4.　まとめ

本稿は短編映画『自死幇助課』の制作プロジェクトの企画から撮影，編集を経て作品が完成するまでの過程とプロジェクトの成果について報告した。本プロジェクトの難しかったところは３つある。

写真 38　ななかまど「第 69 号」への寄稿

第一にプロジェクト管理である。本プロジェクトは結果として「自殺幇助」を扱う作品となったが，企画段階からこのテーマであったわけではなく，企画の決定と脚本執筆に予想以上に時間がかかった。また脚本の担当者の経験不足もあり，いわゆるライターズ・ブロックに陥ってしまうなど，脚本家が欠席する会議もあった。やむを得ない状況ではあったが，今回は脚本家＝監督であったこともあり，プリプロダクションの遅れを招いた。このようなことから撮影予定日が変更になり，キャスティングやアポイントメントにミスが発生するなど，完成が危ぶまれることもあった。しかし，参加した役者が演技経験の豊富な実力者たちであったことや，メンバーに映像研究部の出身者が多く，いったん撮影が始まれば高いプロダクション能力が発揮され，撮影は円滑であった。

次に，チームワークの問題である。今回はゼミ生 10 名のうち半数の５名が映像研究部所属であり，経験者と未経験者に差があったことに加え，男性９名・女性１名という構成であったため，そういった境界線で少しずつ価値観の相違やストレスが蓄積していった。LINE での連絡・情報共有を採用していたこともあり，ちょっとした言い方を発端としたすれ違いなど，チームワークのトラブルに関わる会議や個人面談も多く開かれた。個人の知識・経験不足によるミスや，認識の甘さなどによる失敗もあったが，それらが全体のムードとなっていかないよう，ゼミナール指導教員兼・エグゼクティブ・プロデューサーとして細かく注意した。また，本プロジェクトでは事務所を通した役者が多かったため，途中で学生への自己負担金の追加徴収が発生した。お金に対する反応は様々で，快諾する学生もいれば，不満や不安から，もっと費用を下げられないのかという議題の会議も開かれた。このようにしてチームはプリプロダクションまでに様々な感情の紆余曲折を経ながら，最終的には全員参加でプロジェクトを完遂できた。作品作りの悩みだけでなく，こうした人間関係・チームワークによる摩擦もまた，本プロジェクトが含んでいる学生の成長項目である。報告・連絡・相談によるトラブルは多く見られるが，このようなコミュニケーションの難しさ，ちょっとした配慮の大切さ，そして面白さや技術（スキル）などをできるだけ「見える化」し，意識させるようにした。

最後に，感染症である。本プロジェクトでは撮影開始後チーム内で７名がインフルエンザを発症したが，今後どのようにリスクを減らせるか考えたい。特に近年は（10 年前に比較して）学生の体力がないように感じられるため，撮影が２日以上連続しないことや，撮影前日の準備の上限時間等，前後の香盤表も含めてリスクヘッジを行いたい。当日のマスク着用や手指のアルコール消毒などは効果的であるが，撮影が始まってしまうと徹底が難しいため，できれば撮影１～2 週間前から前日まで意識して運用したい。

北海道では映画学部や映画学科を擁する大学がなく，映画・映像を学びたい学生にとって本学の映像・アニメーションコースの存在は貴重である。本プロジェクトは本学の映像・アニメーションコースの実績を内外へ見せる良い機会であり，着実に成果を上げている。また副次的な成果であるが，このプロジェクトのメンバーから，大手映画製作会社へ就職が内定する者が現れた。本気で映画・映像業界へ進みたい学生にとって，このように挑戦できる機会があることを本学の強みとしていきたい。

5. 最後に

作品の完成から１年半ほど経った 2019（令和元）年 7 月に，ゼミナールあてに自殺予防団体-SPbyMD-から連絡があった。北海道情報大学とも関係が深く，自殺をテーマとしたこの作品をぜひ鑑賞させてほしいということであった。すぐに視聴リンクを送ったところ，

公開中のブログ[6]に感想を掲載してくださった。以下にその一部を抜粋する。

【感想】
なんだかんだ言っても，もし自分の愛する人が，「死」を選ぶほど悩んでいたら。「自死幇助」を受けていたとしたら。そのことを知ってしまったら。

私は，やはり取り乱すと思います。
何が何でも止めます。
助けを求めます。
法律を破ります。

逆に，幇助を受ける側だとしたら…。
そのことは告げずに，静かに死のうと思います。
「自死」で死ぬことがどれだけ悲しいことか，知っているから。
死因は病気で片付けて欲しい。

でも，たとえ法律で「死ぬ権利，選択」が許されていても，自ら「死」を選択するのは，改めなければいけないんじゃないかと，私は思いました。また，そういう世の中になってしまうことは，とても哀しいことだと思いました。

同ブログでは，作品の「良かったところ」の他，「もっと深掘りしてほしかったところ」などいくつかの観点から総評を書いている。自死を選ぶ中年夫婦と出会い，その後主人公がどうなっていくのか，「自死幇助」が制度化された社会はこの後どうなるのか，「その後」をもっと描いてほしかったというのは，札幌国際短編映画祭に出品して観客からも聞いた感想である。このブログのリンクは，すでに卒業した当時の学生スタッフたちに転送した。改めてそれぞれに考えを深めてもらえれば幸いである。

参考文献

[1] ブレイク・スナイダー(著)，フィルムアート社，菊池淳子 (翻訳)，SAVE THE CAT の法則 本当に売れる脚本術， 2010 年
[2] 朝日新聞夕刊，”アパート 9 人の遺体”，2017 年 10 月 31 日（火）
[3] スイス公共放送協会（SRG SSR）国際部，スイスの「死ぬ権利」安楽死を希望する人はどうすればいい？，SWISSINFO.CH, https://www.swissinfo.ch/jpn/スイスの-死ぬ権利-_安楽死を希望する人はどうすればいい-/43914124, 2019.Aug.10 参照
[4] 安楽死・尊厳死を認める「死ぬ権利」法が成立　カトリックのカリフォルニア州知事はどう決断したのか，HUFFPOST, https://www.huffingtonpost.jp/2015/10/06/right-to-die-california_n_8249202.html, 2019.Aug.10 参照
[5] 平成 30 年中における自殺の状況，厚生労働省社会・援護局総務課自殺対策推進室，警察庁生活安全局生活安全企画課，https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H30/H30_jisatunojoukyou.pdf, 2019.Aug.10 参照
[6] 自殺予防団体-SPbyMD-，HIU 島田ゼミ製作短編映画『自死幇助課』鑑賞会の総評，代表補佐理事, https://ameblo.jp/spbymd-satsuki/entry-12496604534.html，2019.Aug.25 参照

<謝辞>本プロジェクトを行うにあたり本学から多大な援助を頂いた。また撮影協力・小道具提供・演出面など全面的な協力をいただいた本学医療情報学科の清水芳行氏に深謝いたします。